

シベリア抑留夜語り

東京都 青木貞一

(一) 収容所

その日は、いつもと違って、宿营地到着が遅れ夜になっても歩かされた。市街地らしいところを通った記憶もないので、遠回りをして来たのでしよう。

後から知りましたが、シベリア三大都市の一つであるウオロシロフという町の郊外でした。長蛇の列は丘の上に導かれ、疲労しきっていた私たち作業大隊の五百人は、暗やみの中で収容所とも知らず、吸い込まれるようにその中へ入ってしまいました。

そこは、鉄条網に囲まれたラーゲルだったのです。昭和二十年の九月下旬か十月上旬のころだったでしょう。東部満州から徒歩での入りですから、十数日を要したのではないでしょうか。

常時ソ連兵の監視、悪質な水、生煮えのコウリヤン、

さらに連日にわたる降雨に悩まされ続けて極度に疲労していました。

「シベリアを経由して日本に帰る」と言われての入ソでしたが、さにあらず、そこは地獄の一丁目だったのです。

翌日から早速私たちは、自分の押し込められている収容所から、自分たちが逃げ出せないように鉄条網を三重、四重と頑丈につくり上げる作業に取りかかることになりました。早くも悲しき運命の訪れでした。

とはいうものの、さすがに根性と体力の持ち主がいて、数日後の真夜中、鉄条網を切断して脱走を企て、その場で銃撃を受け即死、という事件が起きました。

広い収容所は、四隅に高く組み立てられたやぐらがあり、二、三人のソ連兵が夜通し鉄条網沿いに光線に向けて監視しているので、とても脱走の成功なんて考えられるものではありませんでした。

銃殺された者は二人らしい、いや、三人だそうだが、と情報は飛び交いましたが、このうわさが忘れられるころになって再び脱走事件が起きました。

今度は成功したらしい、との情報が出たと思うと、その翌日、追いかけて逮捕され、即日銃殺刑に処せられた、との情報でした。その後も、厳寒が来るまで事件は数回起きました。

(二) 食事の分配

さて、ここで食事の分配について話すことにしましょう。

食事時になると、だれも彼もの眼の玉がランランと輝いてきます。ここは地獄の二丁目か、三丁目か。ほのおやせこけた土色の肌の餓鬼どもが、十数人集まって小さなテーブルの上の「天秤」を見つめています。夕食を分けているところなのです。

目方を計る当番が一人

「どうだ、このくらいでいいか」

はかりはだれかの手製のものです、どのくらい正確なものか知らない。当番は、天秤の水平の度合いを餓鬼ども全員に確かめているわけです。

「チト足りないゾ」と、だれかが言う。当番は二粒のコウリヤンをはしに載せて加えた。

「いいだろう」と、まただれかが。そこでその一人分は計り終わるのかと思うと、そうではなかった。

「どうだ、みんないいか」と、計り手は全員顔を見回して再確認を促す。餓鬼どもは、それぞれに納得して「よし」と答え、かくして順次にそれぞれの飯盒に移されるわけです。

一粒のコウリヤン、一滴の重湯が、自分の命にかかわることを知らされてしまった餓鬼どもにとって、その配分の厳正さは、極限まで要求せざるを得なかったのです。

餓鬼そのものと化した私どもの間では、こうした祭典にも似た行事こそ、収容所での生活に秩序を維持し、殺し合う悲劇を未然に防ぐ一つの方法だったかもしれません。人間の知恵というものでしょう。

(三) やせ細る我が身

私は、シベリアでの第一年目の冬を、ここ第一収容所で越すことになりました。

栄養失調と、零下四十度の酷寒と、寒風の中での作業とが重なって、毎日だれかが死んでいきました。

各自の飯盒には、コウリヤンの重湯が四センチくらいの深さほど、紅茶色のコウリヤン粒がやつと一並び沈んでいるという日が続きました。

そのころ、月に一度入浴がありました。入浴というより、主目的は衣類を住みかに行っているシラミ退治でした。下着から防寒着まで、一つるしにして熱風消毒室に入れ、三十分ほど待つ間にシャワーを浴びるという寸法でした。

その入浴で私たちはみんな驚きました。いつの間にかやせ衰え、ももから足首まで全く同じ太さ、ひざのところだけが丸くふくらんでいるのです。

病気でやせるのならともかく、ただ食べ物が少ないために、これほどまでにやせるのですから、それはそれは言い尽くせないほどひどいものでした。そのとき、これではとても次の入浴までは持つまいと思いました。生き地獄というものです。

作業に出たとき、わずかな溝でもあるとまたぐことができません。一度下において、ドッコイショと向こう側に上がるのでした。またぐために上げた足が、向

こう側に届かないで、ポロリと落ちてしまうからです。足を支える力がなくなっていました。骸骨に皮をかぶせたような姿だったのです。

(四) 死の訪れ

こんなこともありました。ある朝、いつものように目を覚ましましたが、早起きの隣人は寝たままです。私は声をかけながらゆり起こしましたが、動く気配もなく、息絶えていたのです。

全く驚きました。四十を過ぎたらしい背の低い頑丈な体つきの人でしたが、名前はどうしても出てきません。だれにも見取られず、ただ一人で死んでいく、何んたることでしょう。哀れはかなきは人の命、ほげ面が今でも脳裏に残っています。

我が家の庭にも早や立春を迎えました。私は立春を迎えるたびに思い起こすことがあります。ウオロシロフ近郊の第一収容所にいたときのことです。二日間意識不明のまま寝続けたのですが、「今日は立春だそうだ」という声が聞こえてきて、意識が戻ったのです。夢から覚めたようなもうろうとした世界の中から次第

に力がわき、氣力が出て自分を取り戻したのでした。

窓越しに見た立春の空の何と美しかったこと。シベリアにも春があるのだ。生きる喜びを強く強く全身で受けとめたことでした。

「天地無私春又帰」今年の書き初めです。立春、私の生命が復活した春に、大自然に感謝の日々です。

春のおせいシベリアの丘も、日一日と空が澄み、大地が盛り上がってくるような日の続くころでした。一人前の仕事ができない者、いわゆる虚弱者として、私は死者を埋める穴掘隊の一員となりました。

総勢七、八人、朝の点呼が終わり、作業本隊が出払った後からツルハシを肩に、ソロソロと門を出て近くの丘に向かうのです。

元日本軍の兵長が引率し、一人の監視兵がマンドリンの呼び名を持つあの軽機関銃を肩に後からついて来るのでした。

まだ大地は鉄板のように凍り、ツルハシはピーンピーンとはね返ります。私たちの願うノルマの向上を頑固にはねのけるのです。

前記のとおり体力でしたから、ツルハシは二度と続けて振り上げることはできません。一と振り打ち下す、というよりようやく振り上げたツルハシの手の力を抜いてそのまま落とした、という方が正確な表現でしょう。そこでしばらく休み、呼吸を整え、力を蓄えてから二度目を振り上げるのです。死の一步手前の人間の集まりでした。

ある朝、いつものように墓掘隊が集まっていると「兵長は昨夜死んだそうだ」との知らせがありました。彼は二十二、三歳の若武者、責任感も強く、好感の持てる青年でしたが、重労働が重なって息を引きとったのでした。

明日は我が身か、常に死の恐怖を背負っての抑留生活でした。他人の墓穴を掘りながら、おのれの体力を消耗して死んでいく。何たることでしょう。戦争とは。いや、もう戦争は終わっているというのに。

私たちはツルハシを担ぎ、監視兵に促されて、収容所の門を出てあの丘に向かいました。

(五) 死人の部屋

収容所の東の隅に「死人部屋」がありました。幾十人も死体が丸裸のまま積み重ねられていました。死者が多くなるのは酷寒期でしたので、死体は凍ったままです。衣類は全部脱がされ、洗濯して生き残った隊員に支給されるのだということでした。つまり、生き残った者の体温を守り、生命を長持ちさせるための防寒上大切な物だったのです。

私の推定では、第一年目の一と冬で、死者は三分の一に達したものと思っています。内地帰還を夢に見つつそれが果たせずに死んで行った多くの人命、無念を抱いたままあの丘に眠っているのです。

いやはや、とてもひどい話になってしまいました。が、所詮、戦争を語るにきれいな話ではありません。

「万霊よ安かれ」と祈りながら、戦争の残酷さ、悲しさを知ってもらうためにもと、あえてお話しした次第です。

(六) 熱湯でセメントを練ったこと

その日その日の作業は、仕事の種類、隊員個人の体力などが考慮されて、作業隊が編成されるようでした。

私は、れんが造り住宅の建築作業に回されたことがあります。現場は寒風吹きすさぶ平原の一角で、大きなかまどの上のドラム缶にグラグラと湯をわかします。その熱湯でセメントを練る者、セメントを運ぶ者、れんがを積み上げる者、作業は大変困難なものでした。熱湯のセメントが冷めないうちにれんがを積み上げなければなりません。

また、あるときは、鉄道のレールを敷く作業にも加わりました。地ならしは一切不要、草が生えているままの大地に枕木をポンポンと置き、その上にレールを乗せ、釘でとめれば出来上がり、ごく単純な作業のようですが、さにあらずです。骨皮筋衛門の体力で、あのレールを動かすのですから。大勢の力を合わせ何とか作業を進めることができました。

作業中にはいつも小休止がありました。このころになると、監視兵も安心してか、私たちの行動にあまり神経を使わなくなりました。どう見ても暴れ出す元関東軍兵士の体力ではなくなっていたのですから。

さて、私はそのころ、街に出て作業をすることが何

となく楽しみになってきました。それは、市民からパンの切れ端がもらえるという話を聞いたからです。

昨日はだれだれがもらった、今日は自分ももらえるかもしれない、というはかない希望がそうさせたのでした。

ソ連の将校が、軍服姿のまま黒パンを抱えて歩いているのを時々見かけました。これらのことを見聞きした私たちは、それぞれにこの恵みをひそかに期待するようになつたのです。一般市民も我々に対する視線が変つてきました。が、残念なことに私にはついにこの恵みはめぐつて来ませんでした。

乞食根性といわれようが何んといわれようが、食糧で追い詰められた命が訴える真実の心情でした。

(七) 豚とジャガイモの争奪戦

こんなこともありました。

その日の作業も終わり、夕日を背にトポトポとラーゲルに引き揚げる途中のことでした。人家の散在する部落を通つたときのことです。

かねて聞いていたことですが、どこかでジャガイモ

を拾つた者がいるということで、私はひそかにそれを狙つていたのでした。

豚は庭先の洗い場の周りをプープーいいながら餌を探している様子でした。洗いこぼしの小さなジャガイモを食べているではありませんか。

私は少し離れたところに、直径二センチほどのものを見つけ近よりました。豚も私と争うがごとく足早やに近寄つて来ましたが、一瞬の差でその宝物は私の手のものとなりました。数十秒か、数分間かの出来事です。監視兵も見えて見ぬ振りをしてくれたのでしよう。それにしても、豚は私より素早く元氣のよい行動でした。

生のジャガイモ一個、それも径二センチの小さなもの、これを手に入れた喜び、何と例えたらよいのでしょうか。毛布一枚の寝ぐらの中で、秘薬を味わうがごとく、神妙にかじつたこと言うまでもありません。

極端な食糧不足に追い込まれた私は、いや全員でしよう、来る日も来る日も餓鬼道に落ち込むばかりでした。

このときから、祖国日本に帰れたら、真っ先にジャガイモをゆでて、塩をつけて、腹いっぱい食べてやろうなどと、つまらぬ決意をしたものです。その決意は二年後に実現されたのですが、期待ほどの味わいもなく、また感激もわきませんでした。ただただ生きて帰れた喜びが、より強烈だったからでしょうか。

(八) ビート工場で焼き芋の味

おそい春がやつと訪れて、雪一色の丘が次第に地肌を現し始めたころ、一団の仲間とともに第一ラーゲルを出て、街に近い第四ラーゲルに移されました。

それからは、機関車工場で機材の運搬や、広大な構内の掃除など割合楽な作業が続き、やがてビート工場の作業にかかりました。

ちょうどそのころ、朝鮮派遣部隊だった日本軍の抑留者が、大量の米、糧食を持参してここウオロシロフに移動して来た、との情報の流れ、私たちの食事に白米が支給されるなど、一点の光明を見出したのでした。

春かと思うとすぐ夏になる大陸の気候です。

私は、大きなビート工場(砂糖工場)の作業に移りました。ここは、私の「シベリア地獄」の生活期間中では、安らぎのひとときと言えるところでした。

ビートが貨車でどんどん入って来ます。大きなホークを使って外へ投げ出す作業です。大陸の夏の日照りは猛烈で、カラカラに乾いて焼けつくような暑さでした。

やがて、シベリア生活も満一年を迎え、この調子だと自分日本には帰れそうもないという諦めもあつて、精神的に安定期間ともいえるころでした。

広い構内に、無煙炭が高さ一・五メートル四辺十メートルくらい山の積みになって、延々と野積みそのまま続いています。その石炭山に近づくと、熱風が身を包みます。よく見ると自然発火なのか、内部は真つ赤な火です。

さて、ここで抑留者の知恵が働きました。ビート大根を火に埋めて、むし焼きにしようというわけです。これを実行するには、三人が一組となり、監視兵の動向を見張る者、大根を火の中に埋める者、もう一人は

連絡役を受け持つわけです。

最も都合のよい場所をあらかじめ決めておき、石炭山の間をぬって活動開始となる。三十分くらいかけて焼き上げたピートは、焼き芋と同じような味で、餓鬼道抜けやらぬ私たちにとって、これほどありがたいものはありません。

かくしてこの大根焼きはひそかに続けられたのです。ところが、こうした甘い生活も長くは続きません。私たちが楽しみに焼いているピートを、焼き上がる寸前に泥棒する者が現れたのです。ほかでもない、あの警備監視役のマンドリンを持ったソ連兵だったのです。盗みかかれて大根を埋めるところを知らぬ振りで見過ごし、時間を見計らって一瞬早く持ち去るのです。

「ヤ、またやられたヨ」私たちにしてみれば大損害でしたが、もちろん抗議は筋違い。彼らはむしろ好意的で、寛大にこれをとがめようとしませんでした。敵ではなく、戦勝者、戦敗者でもなく、人間と人間の關係に戻りつつあったのでしよう。

こうした抑留者としての生活をしながら、二回目の冬を越し、どうやらここまで命は延びられたのでした。長い間苦しんだ痔病の診断結果で、祖国に帰還できることとなり、昭和二十二年夏、ナホトカから東舞鶴港に上陸、復員することができました。

抑留生活を振り返って

静岡県 熊谷 精 一

私は、昭和十七年十二月一日に臨時召集により第六航空教育隊（八戸市）に入隊し、一期検閲後十八年三月末日樺太大谷の第四十九飛行場大隊に転属。驚いたのは管内は雪の下、営兵は顔だけで防寒服で身を固め、大変な場所に転属してきたと思った。その後間宮海峡を北上して北緯五十度線近くの塔路町にある前進飛行場に分遣隊員として勤務。その間に本隊は北千島占守島の飛行場に転進、私たちも呼び出しを受け十九年六月末、小樽港を出港し、オホーツク海を航空機、駆逐